

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 66

学校名・団体名	名古屋市立高蔵小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	高蔵っ子のことばの力を高める国語科の授業づくり

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1 活動に至る経緯

本校は、平成30年度に開催される「第48回 全国小学校国語教育研究大会 名古屋大会」の会場校として、大会の研究主題である「未来に生きることばの力 ―「深い学び」を拓く国語教室の創造―」に迫るために、主体的な学び・対話的な学び、そして深い学びを目指した国語科の授業づくりに取り組んでいる。

平成27年度から平成28年度は「考えをつなぎ合う授業づくり」を目指して研究に取り組み、①学習の課題を捉え、課題の解決に向けて自ら学習に取り組むことができる児童②課題の解決に向けた話し合いの中で、発言をつないで思考を深め合うことができる児童③学習内容や学習過程を振り返り、次時への学習の課題をもつことができる児童の育成に取り組む、一定の成果をあげることができた。

平成29年度は、大会における本校の提案となる「つなぐ」に重点に置いたことばの力を高める国語科の授業づくりに取り組む、文学作品の読みを自分の生き方を見つめたり、考え方を広げたりすることにつなげる力を育成した。

大会が開催される平成30年度は、求められている児童の資質・能力を伸長し、それに向けて教育活動を改善していくために「つなぐ」というキーワードを位置付け、重視して取り組んでいこうと考えた。それは、教育力の備わった伝統ある本地域と学校を「つなぐ」活動をさらに充実した教育課程を工夫することであり、本校児童個々の資質・能力の伸長について教師、仲間、親、地域の人など他者と「つなぐ」ことを通して図ることであり、さらに具体的授業場面で、自分と友達の考えを「つなぐ」ことで互いに深め合い望ましい学びに導くことであり、児童の心情を友達と「つなぐ」ことにより、助け合いや友情として実感させ、協働していけるようにすることである。そこで、主体的な学び・対話的な学び、そして深い学びを目指した、高蔵っ子のことばの力を高める国語科の授業づくりに取り組むこととした。

2 時期

月	内 容
4～5	研究の骨子の提案、全体会における共通理解、実態把握、授業実践Ⅰの計画立案
6	授業実践Ⅰ、授業改善と授業力向上に向けた研修①椋山女学園大学：森和久先生
7	授業実践Ⅰの成果と課題の検討
8～10	授業実践Ⅱの計画立案、授業改善と授業力向上に向けた研修②椋山女学園大学：森和久先生
11	授業実践Ⅱ（全国小学校国語教育研究大会 名古屋大会）
12	授業実践Ⅱの成果と課題の検討
1～3	年間指導計画の見直しと修正、最終報告会、次年度に向けた研究内容の検討

3 活動内容

(1) 1年「しりたいな どんな人？」

『お手がみ』を教材として、登場人物について、行動や会話から考える学習に取り組んだ。児童は、かえるくんの人物像について「お手がみを書いたこと」や「『きっと、くるよ。』と言ったこと」を基にして「思いやりがある人」と考え、友達に伝えることができた。また、同作者の『クリスマスイブ』を読み、がまくんの人物像をまとめ、2人の関係を



【反応して聞く姿】

「いつもいっしょにいるなかよし」と考えることができた。

(2) 2年「物語の読みからはじまる『わたしのたからもの』のはっ見」

『わにのおじいさんのたからもの』を教材として、体験と結び付けて考えたことを共有する学習に取り組んだ。児童は、『うずらちゃんのたからもの』を読み、『わにのおじいさんのたからもの』で、おにの子が見付けた宝物の表現と比較して、宝物について「努力して手に入れるもの」という考えをもったり、友達の考えを聞いて考えを深めたりすることができた。



【目線も手もピン！】

(3) 3年「物語を読んで大すきなところをしょうかいしよう」

『わすれられないおくりもの』を教材として、登場人物の気持ちを具体的に想像する学習に取り組んだ。また、栄養教諭と連携して、うさぎがもらった「おくりもの」である「しょうがパン作り」を体験した。児童は、森の動物たちが受け取った「おくりもの」の共通点を探すことで、「おくりもの」という表現に込められた価値について「あなぐまに教えてもらった、これからもみんなで助け合えるもの」と捉えることができた。



【心を込めて】

(4) 4年『なぜ』から始まる南吉トークセッション」

『ごんぎつね』を教材として、登場人物の気持ちの変化を想像し、感じ方の違いに気付く学習に取り組んだ。児童は、「なぜ、ごんは兵十にうたれたのだろう」という課題について、「南吉トークセッション」を通して、「『心情の変化』がある『ごん』と、ない『兵十』の違い」と、読みの用語とををを活用して表現することができた。また、半田市立岩滑小学校の6年生と「高蔵読書郵便」を通して読みを深めることができた。



【南吉のふるさとへ】

(5) 5年「椋鳩十の作品を読み味わおう」

『大造じいさんとがん』を教材として、登場人物の人物像や心情の変化を捉える学習に取り組んだ。児童は、「心チャート」を活用して学級全体で考えを共有することで、対比や心情描写を基に、飛び去っていく残雪に「堂々と戦おう」と呼び掛けた大造じいさんの心情を「猟師として、がんの英雄と本気で一対一で戦いたい」と考えることができた。



【全員でつなぐ姿】

(6) 6年「ファンタジーふしぎ発見！」

『きつねの窓』を教材として、表現の効果や物語の全体像を捉える学習に取り組んだ。児童は、非現実世界で起こる不思議な出来事について読み取り、きつねの窓に映るものとぼくの窓に映るものとの違いと共通点について、ベン図を活用して「もう会えない大切な人や物」と考えることができた。また、作品から伝わるメッセージについて「前向きに生きること」と考えをまとめることができた。



【なかまとの対話】

4 子どもたちへの効果

児童の資質・能力を伸長し、それに向けて教育活動を改善していくために「つなぐ」というキーワードを位置付け、重視して、「高蔵っ子」の育成に取り組んだことで、身に付けた豊かなことばの力、ものの見方、考え方、自分の思いを、他の文章での読みにも関わらせ、さらには実社会や未来の生き方を見つめ、考えを広げることにつなげる力を育てることができるようになった。また、対話的な学び、主体的な学び、課題解決的な学習を通しての深い学びが得られる国語科の授業づくりを目指したことで、次期指導要領における授業づくりの提案へとつなげることができたと思う。